

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書(欧文)) 1. MiiPro - Nanami Corpus 2. MiiPro - Asato Corpus 3. MiiPro - Tomito Corpus 4. MiiPro - ArikaM Corpus	共著	2009年11月 2009年12月 2010年1月 2013年8月	Pittsburgh, PA: TalkBank Pittsburgh, PA: TalkBank Pittsburgh, PA: TalkBank Pittsburgh, PA: TalkBank	1.～4. 言語発達の国際データベースであるCHILDESへの貢献。西澤が収集した、1歳から3歳の家庭に於ける母子自由遊び場面のデータについて、質的・数量的解析が可能な形に書き起こし、タグを付与した、公開データベース。
(著書(和文)) 1. 「単身家族(母子・父子家庭)」 「現代家族の病理と治療」『発達心理学ハンドブック』 2. 「行動観察」『言語発達とその支援(シリーズ/臨床発達心理学4)』 3. 「行動評定法」『新・発達心理学ハンドブック』	単著 単著 単著	1992年 2002年 2016年	福村出版、59章、3節、4節 ミネルヴァ書房、第9章3 福村出版、VI部17章3節pp. 864-870.	単親(ひとり親)家庭に関する心理学的研究のレビュー。とくに、研究が社会的な偏見の影響を受けている部分がある事と、今後は社会学的研究との関連を明らかにする方向性が重要な事について。家族療法に関するレビュー。発達心理学及びシステム理論からの批判的検討。59章3節「単親家族(母子・父子家庭)」 「現代家族の病理と治療」(pp. 1035-1047) (東洋編) (第1著者、共著者：柏木恵子) [共同研究につき担当部分抽出不可能] 言語発達の評価と診断の為の行動観察の解説。1. 行動観察の概要：1) 観察の事態と、形態2) サンプリングの方式3) 記録の方式(時間について) 4) 記録の方式(記述の内容について) 5) 行動観察の目的2. 言語発達評価および臨床現場に特有の問題1) 「どこで」「誰と」「何のために」2) 「言語の階層性」と「コミュニケーション」。9章3 「行動観察法」(pp. 158-162)を担当。(岩立志津夫・小椋たみ子編 発達心理学における行動評定法についての解説。1. 視点1：行動観察の実施時点での行動評定法と観察・実験・面接実施後の行動評定。2. 視点2：間接的データと収集法としての行動評定法。3. 視点3：方法による評定法の分類。4. 尺度構成。5. 評定の実施。6. 行動評定という方法の研究上での位置づけ。

<p>(学術論文(欧文))</p> <p>1. “Noun Bias in Early Japanese Vocabulary and Characteristics of Maternal Speech”</p> <p>2. “The Development of the CHILDES-Based Language Developmental Score for Japanese (DSSJ)”</p> <p>3. “The acquisition of Japanese backchanneling behavior: Observing the emergence of aizuchi in a Japanese boy”</p> <p>4. “Exploring the Developmental Sentence Score for Japanese (DSSJ): A comparison of DSSJ and MLU in Spoken Language Samples from Typically Developing Children and Children with Delayed Development”</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2004年3月</p> <p>2006年6月</p> <p>2007年7月</p> <p>2007年8月</p>	<p>Studies in Language Sciences(3):Papers from the Third Annual Conference of Japanese Society for Language Sciences くらしお出版</p> <p>Studies in Language Sciences (5): :Papers from the fifth Annual Conference of Japanese Society for Language Sciences くらしお出版</p> <p>Journal of Pragmatics 39 pp.1255-1274</p> <p>日本コミュニケーション障害学会『コミュニケーション障害学』 24巻2号 pp.88-100</p>	<p>日本語の発達初期の語彙発達に於ける名詞バイアスについて、母親の入力と子の言語使用の関係を4組の親子について調べた。名詞及び事物に焦点をあてた会話スタイルの母親の子の語彙には名詞バイアスが、名詞と動詞の割合がより均衡している母親の子の語彙には、均衡した、或いは、動詞バイアスが見られた。日本語の類型論的特徴というよりも母親の入力の個人的特徴が名詞バイアスの発達に重要な役割を果たしている事が示唆された。</p> <p>言語発達の国際データベースであるCHILDESのフォーマットによるデータを用いて自発話から言語発達、とりわけ文法の発達を測るための指標を開発する試み。指標そのものの開発、標準化、妥当性の検討を行なった。</p> <p>日本語の「相づち」は「発話一内」と「発話一末」に分けることができる。相づちの交換は、話し手による「相づちの誘い」と「聞き手による相づち」から成る。1歳半から3歳1ヶ月までの縦断事例研究により、「発話一内」は「発話一末」より6ヶ月遅れること、誘いについても同様の遅れがある事、相づちを発するより誘いが多い事が見出された。これは相づちの語用論的な価値を示すものである。(第2著者、共著者：Susanne Miyata) [共同研究につき担当部分抽出不可能]</p> <p>(Susanne Miyata, Hiro Yuki Nisisawa)</p> <p>著者たちが開発を進めてきた自発話による言語発達指標であるDSSJについて、健常児と発達障害児のサンプルに対してMLU(平均発話長)との比較を通じて評価を行なった。これら2つの指標間には対応があり、DSSJの指標としての妥当性が示された。 [共同研究につき担当部分抽出不可能]</p> <p>(Susanne Miyata, Kiyoshi Otomo, Hiro Yuki Nisisawa)</p>
--	---	---	--	--

<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 「展望：『親子関係と子どもの発達』Ⅲ章 Micro Analytic Approach」</p>	<p>単著</p>	<p>1990年</p>	<p>『母子研究』社会福祉研究所10</p>	<p>乳幼児及びその養育者の間の行動についてのマイクロ（微視）分析に関するレビュー。 CondonとSanderの古典的研究、Fogelによる理論的位置付け、背景的歴史、70年代及び80年代の発展、モデルと概念、日本の研究について述べた。（Ⅲ章 Micro Analytic Approach、pp. 6-12を担当。共著者：田島信元、上村佳世子、山崎浩一、大場説子）</p>
<p>2. 「『言語の心理学』について①：『言語』はどこに在るか」</p>	<p>単著</p>	<p>1992年</p>	<p>『東京都立大学心理学研究』2</p>	<p>心理学における「言語」の位置付けについての理論的検討を、①生成文法における言語観（生得的UG、デカルト的合理主義、モジュール）②生成文法に対する現行の心理学のスタンス（一般認知的制約論、語用論、折衷派）③進化生物学（Gould, S. J.の立場）の各側面から行なった。 “遺伝子と環境”という二分法的認識と還元主義のための限界を超えるには、全体論的認識の採用とこの認識に基づく弁証法的アプローチである。（pp. 43-52）</p>
<p>3. 「発達科学における事例研究」</p>	<p>単著</p>	<p>1992年</p>	<p>『MIMDIX』財団法人安田生命社会事業団、5-1</p>	<p>発達心理学における事例研究の重要性を述べ、その方法論の理論的整理を行なった。子供の発達を、環境（社会・文化）との関連でどのように描写し、読み取って行くかに関する提案を、具体的な事例を通じて行なった。（pp14-18）</p>
<p>4. 「ろう文化と社会学—聴者によるろう文化理解は果たして可能か？—」</p>	<p>単著</p>	<p>2001年</p>	<p>『徳島大学社会科学研究』第14号</p>	<p>シンポジウムの記録としての論文。エスノメソドロジーの観点からなされた「聴者」によるろう文化に対して、「聴者」による研究が可能であるとする立場と「当事者性」を欠くそのような研究は基本的に不可能であるとする立場の論争。筆者は、この問題を論じる際に、研究を行なう「資格」の問題と、研究の「質」の問題を分離して考えるべきである事を述べた。（pp. 1-53）（第1著者ではない、共著者：金澤貴之、檜田美雄、上農正剛、岡田光弘）[共同研究につき担当部分抽出不可能]</p>
<p>5. 「発話サンプルから言語発達を評価できるか？」</p>	<p>共著</p>	<p>2005年11月</p>	<p>『月刊言語』vol. 34, No. 11[412]</p>	<p>自発話による言語発達指標であるDSSJについての一般向けの解説。 [共同研究につき担当部分抽出不可能]</p>
<p>6. 「公立小学校での英語教育への疑義：発達心理学と社会言語学の視点から」</p>	<p>単著</p>	<p>2005年10月31日</p>	<p>『外国語教育研究』</p>	<p>「シンポジウム：早期外国語教育—可能性と現状—」の一部。公立小学校での英語教育の抱える問題（反対の理由）を発達心理学と社会言語学の立場から論じた。</p>

7. 「手話言語発達研究は言語発達研究全体をより豊かなものにする：鳥越論文へのコメント」	単著	2006年7月20日	『心理学評論』49巻1号	特集「言語獲得」の「手話言語の発達と言語環境」（鳥越隆士）に対して、以下のトピックについてコメントした。言語の普遍性と多様性の問題、モダリティの違いとジェスチャーと非手指記号の問題。ジェスチャーとピジン・クレオール化と臨界期の問題。類型論および手話言語における語の問題。
8. 「書評：串田秀也『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』	共著 (担当部分は単著)	2007年3月31日	『社会言語科学』9巻2号. pp. 97-101.	『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』（串田秀也, 世界思想社, 2006）に対して言語学の観点から書評を行なった（共著者の西阪は社会学の観点からこれを行なった）。串田（あるいは会話分析）の言語に対する立場が、言語学の「ラング+α」であるのか否か、串田の言う「内側からの分析」現在の社会言語学の計量的傾向に対して示唆すること、会話分析における「文化」と「普遍性」について論じた（形式上は西澤が第2著者であるが、実質的には著者兩人ともに第1著者と言ってよい内容である）。
9. 「視覚障害者と歩行訓練士の相互行為の中の触覚についての覚え書き」	共著（第1著者）	2016年10月31日	『現象と秩序』（PRINT ISSN:2188-9848ONLINE ISSN: 2188-9856） 第5号.pp15-32.	歩行訓練場面に於ける視覚障害者と歩行訓練士のふるまいについてフィールド調査を行ない、録画データに対して会話分析の方法論を用いて分析を行なった。視覚障害者が、白杖・手・足裏を用いた触覚によって環境を「知る」ことに注目して分析した。白杖による歩行可能空間の探索、手による物の形状、高さ、質感（肌理、材質etc.）の探索、足裏による道路の状態の探索が実際にどのように行なわれているのかを、とくに2者間の会話を中心に記述した。さらに、「何故触るのか」について議論した。
10. 「失語がある人の生活場面のエスノメソドロジー・会話分析研究（1）」	共著（第1著者）	2017年12月31日	コミュニケーション障害学, (ISSN1343-8451), vol.34no.3,p.162.	失語がある人の生活場面のEMCA研究の可能性について検討した。
11. 「相手の知識状態を把握する：視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面から」	共著（第2著者）	2018年2月23日	人工知能学会研究会資料(SIG-SLUD-B509-03,ISSN0918-5682)pp.14-17.	参与役割・知識の非対称性から視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面を分析した。

12. 「多層的な非対称性のある相互行為場面における間主観的理解の達成：失語がある人の生活場面のエスノメソドロジー・会話分析研究(4)」	共著(第1著者)	2018年2月23日	人工知能学会研究会資料(SIG-SLUD-B509-03,ISSN0918-5682)pp.18-23.	参与役割・知識・能力という多層的な非対称性から、失語がある人の生活場面の中で間主観的理解が如何に達成されるかを記述した。
13. ① 「日本語の言語発達のランドマーク：特集にあたって」	単著	2018年4月30日	コミュニケーション障害学,vol.35no.1,p.11	日本語言語発達におけるランドマークの意味に関するシンポジウムの座長としてその特集論文の序言。
14. 「「触る」ことの認知的動機と社会的動機：視覚障害者の歩行訓練場面における事例から」	共著(第1著者)	2018年8月30日	2018年度日本認知科学会第35回大会論文集, pp.992-997	歩行訓練場面で視覚障害者が白杖を持ち替えて対象物に直接手で触るといふ出来事には、認知的な動機と社会的な動機が働いている。
15. 「視覚障害者の歩行訓練についてのエスノメソドロジー・会話分析研究：間主観的理解と触覚」	共著(第1著者)	2018年12月31日	コミュニケーション障害学, vol.35no.3, p.124	歩行訓練場面で視覚障害者が白杖を持ち替えて対象物に直接手で触ることは、晴眼者における共同注意と類似の機能が見られる。
16. 「引き延ばされる「今」：視覚障害者の歩行訓練場面に於ける「『今・ここ』性の違い」と「タイミング調整」」	共著(第1著者)	2019年3月1日	人工知能学会研究会資料(SIG-SLUD-B803,ISSN0918-5682), pp.78-79	歩行訓練場面では白杖という道具＝人工物によって視覚障害者の身体、感覚、認知が拡張され、時間的にも拡張されるが、これには限界があり、訓練士は説明のタイミングを調整することによって、より大きな拡張を成し遂げている。京大協調的知能共同研究講座との共催特別セッション「時間と記憶 ～自己と他者のあいだの礎～」における発表の論文。
(紀要論文) 1. 「幼児の情動認知発達に関する予備的研究」	単著	1998年	『人間科学(常磐大学人間科学部紀要)』15-2	幼児が他者の表情から情動を認知し表現する認知過程(＝情動表情認知)と、特定の状況における他者の情動を推測し表現する認知過程(＝情動状況認知)を比較し、幼児における情動認知過程の発達についてのモデルを構築するための研究デザインを考察した。前者の認知は4歳で、後者の認知は6歳までの間に成人に近い成績を示す事が示唆され、先行研究に比べて早期にこれらの認知が成立する可能性が示された。(pp.31-41)(第1著者、共著者：下川昭夫)[共同研究につき担当部分抽出不可能]

2. 「「相づち」再考－ 幼児と痴呆性老人に 於ける「相づち行 動」についての探索 的研究」	共著	1998年	『人間科学（常磐大 学人間科学部紀 要）』16-1	「相づち行動」の概念的整理を行ない研究の理論モデルを提案し、子供の言語発達の中での「相づち行動」の発達の記述と痴呆性老人のコミュニケーション行動の中での「相づち行動」の実態の記述を行なった。子供では、「相づち誘引行動（話し手としての行動）」が「相づち授与行動（聞き手としての行動）」より先に発達する事、痴呆性老人では、「相づち授与行動」が認知機能の低下と単純には関連しない事、相づちの機能・形態・分布によってその喪失に差が有る事が示された。（pp. 1-16）（第1著者、共著者：宮田スザンヌ・矢富直美・宇良千秋）[共同研究につき担当部分抽出不可能]
3. "Adapting the CHAT Transcription System to Conversational Analysis Needs:Backchanneli ng Behaviour as a Test Case"	共著	1999年	『視聴覚研究（中京 大学視聴覚教育セン ター紀要）』8	言語データの書き起こし（電子化）及び解析のためのコンピュータ支援システム（CHILDES）の書き起こしフォーマット（CHAT）を会話分析に使用するためのテストケース的研究を、相づち行動に関する2種類のデータ（幼児及び痴呆性老人：前者はもともとCHATフォーマットで、後者は（SPSSに対応する）別の形式で作られたもの）を用いて試みた。会話分析におけるCHATフォーマットの有効性が示された。（pp. 85-94）（第2著者、共著者：Susanne Miyata）[共同研究につき担当部分抽出不可能]
4. 「初期語彙の名詞優 位性とサンプリング 方法」	共単	1999年	『愛知淑徳短期大学 「研究紀要」』38	言語獲得の初期における語彙に見られる名詞優位性の問題に関わって、初期語彙の収集方法（①親の報告：チェックリスト②日誌データ③タイムサンプリング）について検討した。①及び③の特徴と問題点を検討し、さらに同一対象に対する①と③の方法の比較を行なった。「名詞優位性」の諸研究には収集方法によるバイアスが見られ、①と③の組み合わせによる方法が適切であることが示唆された。（pp. 63-78）（第2著者、共著者：宮田スザンヌ）[共同研究につき担当部分抽出不可能]
5. 「相づち研究におけ る会話構造モデルに ついて」	単著	2003年	『人間科学（常磐大 学人間科学部紀 要）』20-2	英語に於けるBackchannelに似ているが異なりも大きい日本語の相づちに関して、研究目的、データの性質、相づちの定義や形式、相づちの起きるコンテクスト、頻度、要因、課題についてレビューした。また、筆者の提唱する文内相づちと文末相づちという概念について述べた。話者交代について、one-at-a-time model以外のものとして、collaborative modelを提出した。（pp. 77-91）

<p>6. “The acquisition of noun-phrase structure in Japanese children”</p>	<p>共著</p>	<p>2004年3月</p>	<p>Bulletin of Aichi Shukutoku University, Faculty of Creativity and Culture 4.</p>	<p>子供は通常4歳から5歳で文法知識を獲得するが、個人差も大きく、そのアセスメントにも困難が伴う。第1著者と他の研究者は、英語を対象としたDevelopmental Sentence score (DSS) をもとにDevelopmental Sentence score for Japanese (DSSJ) を開発した。本研究では、名詞句の獲得に関してその個人的な過程を7人の子供について1歳から5歳まで調査した。この結果に基づき、DSSJの枠組みによって名詞句について検討した。</p>
<p>7. 「自発話分析による新しい言語発達指標 (DSSJ) の検討 - 障害児と健常児の発話サンプルへの適用 -」</p>	<p>共著</p>	<p>2005年3月</p>	<p>『医療福祉研究』1号</p>	<p>著者たちを含むグループが開発を進めてきた自発話による言語発達指標であるDSSJについて、健常児と障害児のサンプルを用いて妥当性についての予備的な評価を行なった。[共同研究につき担当部分抽出不可能]</p>
<p>8. 「今、ここ」を引き延ばすこと：歩行訓練における環境構造化実践の相互行為分析</p>	<p>共著 (第1著者)</p>	<p>2016年3月31日</p>	<p>常磐大学大学院学術論究, 第3号. pp25-43.</p>	<p>歩行訓練場面に於ける視覚障害者と歩行訓練士のふるまいについてフィールド調査を行ない、録画データを用いて分析を行なった。とくに、歩行訓練士の言語を中心としたふるまいに見られた特徴的な連鎖構造を「予告フォーマット」としてモデル化した。</p>
<p>9. 市民・行政協働ミーティングにおける会話の分裂についての考察 - 水戸市協働推進事業ミーティングのEM/CA研究 -</p>	<p>共著 (第2著者)</p>	<p>2016年3月31日</p>	<p>常磐大学大学院学術論究, 第3号. pp. 103-118.</p>	<p>話し合いの場での人々のふるまい、とくに会議やミーティングでのふるまいについて、①②と同様にフィールド調査を行ない録画データを用いて分析を行なっている。この論文ではとくに、10名前後のミーティングの場面で2カ所から数カ所で見バラバラの会話が発生するように見える「分裂」に焦点を当て、「分裂」が起こるしくみとそれがどのような課題を解決しているのかについて検討した。</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1. 『サイエンス (日本版) 』</p>	<p>(単著)</p>	<p>1983年</p>	<p>日系サイエンス社、9月号</p>	<p>「クレオール諸語 (Creole Languages, Derek Bickerton, Scientific American, September, 1993)」世界中に散在しているクレオール諸語は、それぞれが独自に発達したにもかかわらず、共通の文法構造をもっている。また、不思議なことに、覚え始めたばかりの子供のことばは、クレオール諸語の文法そのままであるということがハワイ・クレオールの調査からわかってきた。</p>

<p>2. 『思春期・青年期の理論と実像：米国における実態研究を中心に』</p>	<p>(単著)</p>	<p>2002年</p>	<p>ブレーン出版、第9章</p>	<p>青年が幼児期から成人期にいたる移行の時期にいかに関し、発達するかを米国の於ける実体研究を中心に論じている。9章では、如何に若者がセクシャリティやロマンスに接近するか、また、マスターベーション、ホモセクシャリティ、避妊、妊娠、性的伝染病のような事柄を扱うための、大人諸関係の議論が展開されている。(Adolescence :A Developmental Transition, 2nd edition, D.C.Kimmel and I. Weiner, 1995) (担当部分：第9章「恋愛と性」1節：恋愛と性、2節：性についての疑問と関心、3節：性の志向性 pp. 389-418、河村望・永井徹(監訳))</p>
<p>3. 『意味論的転回：デザインの新しい基礎理論』</p>	<p>共著(担当部分は単著)</p>	<p>2009年</p>	<p>株式会社エスアイビー・アクセス</p>	<p>デザインの基礎理論の中で人工物とその評価に使われる言語の関係について。コミュニケーションと言語そのものの特質および評価方法について。言語のカテゴリー、感性工学、SD法、自由連想法。言語とアイデンティティ、メタファー、ナラティブ、文化について。(担当部分：第4章「言語における人工物の意味」 pp. 171-204)</p>
<p>(報告書・会報等) 1. 「'92年発達研究ワークショップ報告」</p> <p>2. 「第5回研究大会シンポジウム「発達する心と会話」」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>1992年</p> <p>2001年</p>	<p>『CORDER NEWS LETTER』(発達科学研究教育センター)、25</p> <p>『社会言語科学』第3巻第2号</p>	<p>日本発達心理学会国際ワークショップの報告書。発達研究における非線形数学理論の応用の可能性について。</p> <p>司会をしたシンポジウムの報告。1. シンポジウムの主旨 2. 会話における語彙の獲得(仲真紀子)：対話における助数詞の使用、母親は語彙獲得を導くプログラムをもっているのか 3. 幼児の会話維持における言語入力の役割(秦野悦子) 4. 障害児のコミュニケーション発達と語用論的指導(長崎勤) 5. コメント(柏崎秀子、宮田Susanne) pp. 90-95</p>
<p>(国際学会発表) 1 A case of Backchannels in Demented Elderlies</p>	<p>共同発表(第1発表者)</p>	<p>1998年</p>	<p>Workshop“How and why I auguage use”. 日本女子大学.</p>	<p>痴呆性老人の会話におけるあいづちの観察から、あいづちが会話の維持において持つ基本的といえる機能について、その可能性を検討した。</p>

2. "Noun Bias in Early Japanese Vocabulary and the Role of Maternal Input""Early Vocabulary Acquisition in Japanese Children:Facts and Factors"	共同発表 (第2発表者)	1999年	Symposium6-073,12th World Congress of Applied Linguistics. 早稲田大学.	初期語彙獲得に関して、日本語と同タイプである朝鮮語や、類似のタイプである中国語では動詞優位性が報告されているにも関わらず、日本語においては、言語類型論的な予測に反して、名詞優位性が報告されてきた。ここでは、複数例の縦断データによって、その反証例を示し、さらに、母親のインプットを詳細に検討することによって、縦断言語のタイプよりも、個々の母親のインプットが名詞優位性(或いは非名詞優位性)の決定因となる事を示した。(第2発表者)
3. Touching in Interaction between Visually Impaired People and Orientation and Mobility Specialists on Street-walking Training Session	共同発表 (第2発表者)	2017年3月16日	Workshop on Touch and Vision in Interaction, 2017/03/16-17開催, 政策研究大学院大学	「視覚障害者と歩行訓練士の相互行為の中の触覚についての覚え書き」『現象と秩序』第5号のデータの一部及び追加のデータについて、WSのテーマである触覚と視覚の観点から再分析を行ない、視覚の4つのスコープ (long vision, short vision, peripheral vision, immediate vision) というモデルを提出した。
4. Co-constructed knowledge of surrounding environments: Collaboration between the visually impaired and the sighted	共同発表 (第2発表者)	2018年7月11日-15日	The 5th International Conference of Conversation Analysis – ICCA-18, Loughborough University, UK,2018/7/11-15	歩行訓練場面で視覚障害者と歩行訓練士が環境についての知識を共同構築していることを記述した。ポスター発表。
5. Competition and mutual complementation between two place formulations: Asymmetric participation resources in interaction between visually-impaired and sighted people	共同発表 (第2発表者)	2019年6月18日	Atypical Interaction Conference.Helsinki University.Helsinki (Suomi = Finland). 2019.6.17-19	視覚障害者の歩行訓練に於いて、「場所」の「定式化formulation」が、参与者間(視覚障害者と歩行訓練士の間)で異なる時に、すなわち、同じものを異なる名称で呼ぶ時に、参与者の間でどのような相互行為が行なわれるかを、「坂」「斜面」という事例によって検討した。具体的には以下の分析・記述を行った。視覚障害者は触覚入力に依存しており、晴眼者が視覚的に取得した情報は、触覚入力的資源を補完する。視覚障害者は、経路の説明を受け取るときに触覚入力に言及することがある。これは、視覚障害者の独立性とトレーニング効果を表示すると解釈できる。視覚障害者が通常とは異なる語を使用した場合、訓練士は暗黙的にそれを修正しようとしたが、最終的には譲歩した。

<p>6. Collaborative achievement of intersubjective understanding in multi-layered asymmetrical talk-in-interaction: Daily life scenes of a person with aphasia from ethnomethodological and conversation analytic perspectives</p>	<p>共同発表 (第1発表者)</p>	<p>2019年6月18日</p>	<p>Atypical Interaction Conference.Helsinki University.Helsinki (Suomi=Finland). 2019.6.17-19</p>	<p>失語症のある人 (K) が教えている陶芸教室の活動を日常生活の場面として分析、記述した。 (1) ①2種類の非対称性がある。一つ目は、知識の非対称性、二つ目は、コミュニケーションのレパートリーである。教師=Kは失語症のある人であり、彼のコミュニケーション行動は失語症のある人の特徴を示している。「健常」の生徒は、失語症のある教師が言ったことを繰り返すという方略を採用し、確認を得て、コミュニケーションを達成する。②間主観的理解は、共同の成果である。手による身振りと副詞で構成される発話は、可能な述語を完了させる。失語症のある人は、それを確認し、完全な文章を受け取る。この文の共同構築は、間主観的理解が共同の成果であることの強力な支持を与える。 (2) 私たちの結論は、チャールズ・グッドウィンが発見したことを確認する。人間のコミュニケーションは環境に組み込まれている。テストおよびトレーニングの状況では、失語症のある人は、自分で行動することを余儀なくされ、言語にのみ焦点が当てられる。しかし、彼らは支援をしてくれる人々のいる社会に住んでいる。陶芸教室などの日常生活の状況では、失語症のある人は、言語以外の方法を利用できる。彼らはまた、周囲の人々から支持的な反応を得る。病院で得られたテストのスコアは、彼らのコミュニケーションについてほとんど語らない。</p>
<p>7. Information giving and receiving with focus on "perception" of the visually-impaired: Combined usages of touching and kore in street-walking training sessions</p>	<p>共同発表 (第2発表者)</p>	<p>2019年7月4日</p>	<p>Conference of the International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis Mannheim (Germany). 2019.7.2-5</p>	<p>本発表の焦点は、日本語のダイクティックのひとつである「これ」を使用して参照を確立するという事態である。事前に経路の説明を行ない、簡潔な語「これ」で簡潔な参照のための発話を行なうという方略は、視覚障害者と晴眼者の相互行為の空間的および時間的制約に対応する。本発表で検討された相互行為は、ふたつの点でユニークである：その動き（歩行）が関与することと、ひとりの参加者が視覚入力にアクセスできないこと。これら2つの特徴が相互行為でどのように現れるかをさらに探求することが、今後の課題である。</p>
<p>8. Touching in the streets, on the road, in the museums.</p>	<p>単独発表</p>	<p>2022年3月22日</p>	<p>International "Workshop,Museum, Multimodality and Embodiment, Sociological Robotics"</p>	<p>歩行訓練、触常者ランニング、触るワークショップという3つの場面に於いて触常者（視覚障害者）と見常者（晴眼者）がどのように相互行為を行なっているのかを、とりわけ「触る」という行為から明らかにすることを目的としている研究計画の報告を行なった。</p>

(国内学会発表) 1. ～ 「発達初期の母子関係と子どもの発達 その3, 4, 5, 7 (計4件)	共同発表	1989年	日本教育心理学会第31回総会	1. ～5. は、発達初期 (0歳から) の母子関係に関する縦断的研究。家庭での構造化された場面での自由遊びの観察と実験 (ビデオ録画)、質問紙結果などの多変数の相関研究である。5. はとくに言語発達についてその内部構造の分析を多変量記述統計によって行なっている。
5. 「発達初期の母子関係と子どもの発達 その6 言語発達の構造」	共同発表	1989年	日本教育心理学会第31回総会	(5. のみ第1発表者)
6. 「母子 (3ヶ月児) 間の音声による伝え合いについての探索的データ解析」	単独発表	1990年	日本発達心理学会第1回大会	3ヶ月児の発声とその母親の発声・ことばかけとの間の時間的關係 (タイミング) および周波数 (ピッチの高さおよびパターン) について探索的データ解析を行なった。
7. 「母子間の音声による伝え合いについて: 縦断研究のためのパイロットスタディ (3ヶ月～24ヶ月)	単独発表	1990年	日本心理学会第54回大会	母子間の音声による伝え合いについて、縦断研究をおこなうためにパイロットスタディとして事例研究 (1事例) を3ヶ月～24ヶ月の期間について行なった。
8. ～ 「幼児の情緒調整についての多角度からの記述 (1)、 (2)」	共同発表	1990年	日本心理学会第54回大会	8. ～10. の3件は幼児がフラストレーション状況に置かれた場合に見せる情緒調整を調べるために、フラストレーションを実験的に引き起こし、その際の幼児の対処行動を多角度から見ようとしたものである。
10. 「幼児の情緒調整についての多角度からの記述 (3)」	共同発表	1980年	日本教育心理学会第32回総会	(10. のみ第1発表者)
11. 「発達初期の母子間コミュニケーション (1)」	単独発表	1992年	日本発達心理学会第3回大会	6. と7. の研究を統合して発展させたもの。複数の事例で縦断研究を行なった結果、こどもの発声のパターンが親の発声のパターンを導き出している可能性が示唆された。
12. 「発達初期の母子間コミュニケーション (2): 全体論的認識に基づく言語観と弁証法的アプローチ」	単独発表	1992年	日本心理学会第56回大会	11. の結果に基づき、言語発達研究に於いても、発達の他の領域と同じように、“遺伝子と環境” という二分法的認識と還元主義のための限界を超えるには、全体論的認識の採用とこの認識に基づく弁証法的アプローチが必要であることを述べた。

13. 「幼児の主観的世界・外的活動と仲間関係」	共同発表	1993年	日本発達心理学会第4回大会	15. の概要欄にまとめて記述する。
14. 「否定表現：母親にとって子（2歳）の否定的行動とは：日誌データの多変量解析による整理」	共同発表	1993年	日本発達心理学会第4回大会	母親が子（2歳）の行動のうちどのようなものを否定的な行動と見ているのかを縦断的・1事例・日誌法で探った。日誌の記述をカード化し、パイソソート法により整理し、質的データの多変量解析（林の数量化理論に類似した方法）によって解析した。（第2発表者）
15. 「幼児の主観的世界・外的活動と仲間関係 2」	共同発表	1993年	日本教育心理学会第35回総会	13. 15. 16. 17. は、8. 9. 10. を発展させたものであり、個々の幼児が生きる主観的世界と実際の外的活動と実際の仲間関係の在り方を、箱庭、インタビュー、観察、実験など様々な手法を用いて探ろうとしたものである。13. は研究プロジェクトの理論と方法の紹介、14. は箱庭による幼児の主観的世界の記述、16. 17. は幼児がフラストレーション場面で発する音声から情緒を測定する方法についてである。16は、音声と情緒との相関的研究、17. は音声の質に焦点を絞って、その評価用語について検討を加えた。（13. 16. 17. は第1発表者）
16. 「幼児の主観的世界・外的活動と仲間関係 3：音声から幼児の情緒を知る」	共同発表	1994年	日本教育心理学会第36回総会	（第1発表者）15. の概要欄にまとめて記述する。
17. 「幼児の主観的世界・外的活動と仲間関係 4：フラストレーション状況での幼児の声の質に関する評価用語の検討」	共同発表	1995年	日本発達心理学会第6回大会	（第1発表者）15. の概要欄にまとめて記述する。

18. 「難聴児における初期言語の評価法の検討：発話状況に基づく機能の形式の分析」	共同発表	1995年	第40回日本音声言語医学会総会・学術講演会	<p>18. から21. は、その障害ゆえに、発話が極端に少ないために、困難であるとされている、重度の難聴児における初期言語の発達を測定・評価するための方法を検討するプロジェクトの成果の一部を発表したものである。</p> <p>発話が少ないことから、現状の把握・将来の発達の予測・訓練計画の立案・親への指導などのためには、言語の形式面からのみではなく、実際のインターアクション（相互交渉）の中で、それぞれの発話が持つコミュニケーション上の機能からの評価が必要である。</p> <p>18. 評価法の枠組みの紹介、19. は健聴児と難聴児の1事例ずつの比較、20. は複数の健聴児と19. と同じ難聴児との比較である。2つの研究では、健聴児と難聴児に量的・質的な特徴があることが示された。</p> <p>21. では、それまでのデータに基づいて形式面と機能面の両方のカテゴリーの分類基準の再検討を行なった。</p> <p>(19. と20は第1発表者)</p>
19. 「難聴児における初期言語の評価法の検討2：発話状況に基づく機能の形式の分析2：健聴児の事例による比較」	共同発表	1995年	日本教育心理学会第38回総会	(第1発表者)
20. 「難聴児における初期言語の評価法の検討3：発話状況に基づく機能と形式の分析3：健聴児の事例による比較2」	共同発表	1996年	第41回日本音声言語医学会総会・学術講演会	
21. 「難聴児における初期言語の評価法の検討4：カテゴリーの分類基準」	共同発表	1997年	第42回日本音声言語医学会総会・学術講演会	(第2発表者)
22. 「難聴児における初期言語発達の評価法の開発について」	単独発表	1997年	常磐大学発達研究会	18. ～21. の研究内容の報告
23. 「幼児の情動認知の発達1：情動認知と情動状況認知の比較（予備研究）」	共同発表	1998年	日本発達心理学会第9回大会	<p>幼児による他者の情動の認知の発達を研究するための予備的研究。情動認知の過程を、幼児が他者の表情から情動を認知し表現する認知過程（＝情動表情認知）と、特定の状況における他者の情動を推測し表現する認知過程（＝情動状況認知）に分割するモデルを提案し、それぞれの過程を測定する方法を示した。（第1発表者）</p>

24. 「相づち行動の獲得と消失(1)：幼児の言語発達のなかの相づち」	共同発表	1998年	社会言語科学会第2回研究大会	24. と25. では、相づちを、その形式・機能・分布から整理し、幼児の言語発達の中での「相づち行動」の発達と痴呆性老人のコミュニケーション行動の中での「相づち行動」の実態の記述を行なった。幼児では、「相づち誘引行動(話し手としての行動)」が「相づち授与行動(聞き手としての行動)」より先に発達する可能性、痴呆性老人では、「相づち授与行動」が認知機能の低下と単純には関連しない可能性、相づちの機能・形態・分布によってその喪失に差が有る可能性が示された。(第2発表者)
25. 「相づち行動の獲得と消失(2)：面接場面における痴呆性老人の相づち行動」	共同発表	1998年	社会言語科学会第2回研究大会	(第1発表者)
26. 「幼児の相づち行動の発達」	共同発表	1998年	第4回JCHAT/CHILDES年次大会	26. 27. は24. 25. の内容をデータを増やし、かつ、より詳細に分析、考察したもの。結果は24. 25. の結果が確認された。(第2発表者)
27. 「痴呆性老人の相づち行動」	共同発表	1998年	第4回JCHAT/CHILDES年次大会	(第1発表者)
28. 「難聴児における初期言語の評価法の開発について」	単独発表	1998年	発達心理学会発達障害分科会例会、お茶の水女子大学、東京	難聴児における初期言語の評価法の開発について、その基本的な枠組みについて報告した。
29. 「初期語彙における名詞/動詞優位性と母親のインプット」	共同発表	1999年	日本発達心理学会第10回大会	日本語の初期語彙獲得における名詞優位性について縦断データを用いて母親のインプットを詳細に検討することによって、個々の母親のインプットが名詞優位性(或いは非名詞優位性)の決定因となる可能性を示唆した。(第2発表者)
30. 「情動のラベリングが表情のカテゴリー化に及ぼす影響の発達の検討」	共同発表	1999年	日本発達心理学会第10回大会	23. から継続した研究。23. でモデル化した2つの過程のうち、とくに幼児が他者の表情から情動を認知し表現する認知過程(=情動表情認知)に注目し、「ラベリング」すなわち「言語」が表情のカテゴリーに及ぼす影響を、年少児、年中児、年長児の各グループごとに検討した。年長児に於いて高い成績が見られ、言語の発達との関連が示唆された。(第2発表者)

31. 「日本手話に於ける談話管理 (1)」	単独発表	2000年	社会言語科学会第5回研究大会	日本手話における談話管理の問題を、とくに、会話継続機能を持つ要素である「相づち」の形態・機能・分布を解析する事によって検討した。(音声)日本語では音声的・語彙的に表現される相づちの機能が、日本手話では、視線、手指動作、非手指動作(頷き、首振り、眉上げと眉ひそめ)で表現される事、眉上げと眉ひそめは、話し手の話しの内容に「共鳴」している可能性が示された。
32. 「日本発達心理学会大会(第1回から第11回)の構造・機能分析」	単独発表	2000年	日本発達心理学会第11回大会ラウンドテーブル「発達心理学会のこれまでの歩みと将来展望」話題提供	日本発達心理学会大会の第1回から第11回までのプログラムの内容を分析し、学会の変化、今後の方向性について検討するリソースを提供した。
33. "Noun bias in early Japanese vocabulary and characteristics of maternal speech"	共同発表	2001年	JCHAT言語科学研究会第3回年次大会	初期語彙獲得に関して、日本語と同タイプである朝鮮語や、類似のタイプである中国語では動詞優位性が報告されているにも関わらず、日本語においては、言語類型論的な予測に反して、名詞優位性が報告されてきた。ここでは、複数例の縦断データによって、その反証例を示し、さらに、母親のインプットを詳細に検討することによって、縦断言語のタイプよりも、個々の母親のインプットが名詞優位性(或いは非名詞優位性)の決定因となる事を示した。(第2発表者)
34. 「手話会話におけるターンテイキングに関する基礎検討」	共同発表	2002年	電子情報通信学会手話情報学・福祉工学会	手話のターンテイキングに着目し、手話会話構造のモデル化を試みた。著者らのグループで開発した対話映像解析支援システムを用いて、ネイティブサイナーによる会話映像を解析し、発話時間及び手指動作並びに非手指動作の重なりについて検討した。同時発話の前後で発話交替が起きている可能性を見いだした。また、非手指信号の一つであるうなずきの同時表出について、手指語彙に付随したうなずきで、同時表出する確率が非常に高いことを確認した。(第2発表者)
35. 「公立小学校での英語教育への疑義：発達心理学と社会言語学の視点から」	単独発表	2004年10月24日	外国語教育学会	「シンポジウム：早期外国語教育ー可能性と現状ー」での報告。公立小学校での英語教育の抱える問題(反対の理由)を発達心理学と社会言語学の立場から論じた。
36. 「知的障害児と健常児の自発話分析による新しい言語発達指標(DSSJ)の検討」	共同発表	2005年5月21日	第31回日本コミュニケーション障害学会学術講演会	著者たちを含むグループが開発を進めてきた自発話による言語発達指標であるDSSJについて、健常児と障害児のサンプルを用いて妥当性についての評価を行ない、この指標の有効性が示された。

37. 「『子育ての会話分析—おとなと子ども「責任」はどう育つか』(高田明・嶋田容子・川島理恵編, 2016, 昭和堂)へのコメント」	単独発表	2016年3月6日	EMCA研究会2015年度春の研究例会	『子育ての会話分析—おとなと子ども「責任」はどう育つか』(高田明・嶋田容子・川島理恵編, 2016, 昭和堂)へのコメントを行なった。とくに会話分析が発達と概念を扱えるのかについて。
38. 「触ってみる: 触覚を資源とする視覚障害者と歩行訓練士の相互行為」	共同発表 (第1発表者)	2016年3月16日	日本認知科学会の研究分科会「間合い—時空間インタラクション」第4回研究会	歩行訓練場面に於ける視覚障害者と歩行訓練士のふるまいについてフィールド調査を行ない、録画データを用いて分析を行なった。視覚障害者が、白杖・手・足裏を用いた触覚によって環境を「知る」ことに注目して分析した。白杖による歩行可能空間の探索、手による物の形状、高さ、質感(肌理, 材質etc.)を探索、足裏による道路の状態の探索が実際にどのように行なわれているのかを記述した。さらに、「何故触るのか」について議論した。
39. 「シンポジウム「日本語発達のランドマーク」」	座長	2017年7月8日	第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 愛知淑徳大学 星が丘キャンパス.	日本語言語発達におけるランドマークの意味に関するシンポジウムの座長を務めた。
40. 「失語がある人の生活場面のエスノメソドロジー・会話分析研究(1)」	共同発表 (第1発表者)	2017年7月9日	第43回日本コミュニケーション障害学会学術講演会. 愛知淑徳大学 星が丘キャンパス.	失語がある人の生活場面のEMCA研究の可能性について音声データを用いて提示した。
41. 「失語がある人の生活場面のエスノメソドロジー・会話分析研究(2)」	共同発表 (第1発表者)	2017年9月14日	2017年度日本認知科学会第34回大会. 金沢大学角間キャンパス.	失語がある人の生活場面における間主観的理の達成を、副詞と身振り、「まあね」という定型表現、理解を適切な位置で示すことに注目して画像データを用いて提示した。
42. 「「わかっている」ことを示すこと: 知覚の不均衡における認識の擦り合わせ」	共同発表 (第2発表者)	2017年9月14日	2017年度日本認知科学会第34回大会. 金沢大学角間キャンパス.	知覚の不均衡のある状況で認識が協働的に擦り合わされる様子を視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面から画像データを用いて提示した。
43. 「発話を重ねること: 視覚障害者と晴眼者における「素早い」間主観的理解への志向」	共同発表 (第2発表者)	2017年12月10日	第1回共創学会年次大会. 早稲田大学 西早稲田キャンパス.	「発話の割り込み」「重なり」から相互行為者が「素早い」間主観的理解へと志向していることを視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面から画像データを用いて提示した。

44. 「失語がある人の生活場面のエスノメソロジー・会話分析研究(3): 発話の共同構築による間主観的理解の共創的達成」	共同発表 (第1発表者)	2017年12月10日	第1回共創学会年次大会. 早稲田大学 西早稲田キャンパス.	失語がある人の生活場面における間主観的理の達成を, 発話の共同構築に焦点化し画像データを用いて提示した.
45. 「相手の知識状態を把握する: 視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面から」	共同発表 (第2発表者)	2018年3月1日	人工知能学会音声・言語理解と対話処理研究会 (第82回). 国立国語研究所.	参与役割・知識の非対称性から視覚障害者と歩行訓練士の相互行為場面を分析し, 画像データを用いて提示した.
46. 「多層的な非対称性のある相互行為場面における間主観的理解の達成: 失語がある人の生活場面のエスノメソロジー・会話分析研究(4)」	共同発表 (第1発表者)	2018年3月1日	人工知能学会音声・言語理解と対話処理研究会 (第82回). 国立国語研究所.	参与役割・知識・能力という多層的な非対称性から, 失語がある人の生活場面の中で間主観的理解が如何に達成されるかを画像データを用いて提示した.
47. 「視覚障害者の歩行訓練についてのエスノメソロジー・会話分析研究: 間主観的理解と触覚」	共同発表 (第1発表者)	2018年5月12日	第44回コミュニケーション障害学会学術講演会. 北里大学相模原キャンパス.	歩行訓練場面で視覚障害者が白杖を持ち替えて対象物に直接手で触ることは, 晴眼者における共同注意と類似の機能が見られることをビデオデータを用いて示した.
48. 「「触る」ことの認知的動機と社会的動機: 視覚障害者の歩行訓練場面における事例から」	共同発表 (第1発表者)	2018年9月1日	2018年度日本認知科学会第35回大会, 立命館大学 大阪いばらきキャンパス (大阪府茨木市)	歩行訓練場面で視覚障害者が白杖を持ち替えて対象物に直接手で触るといふ出来事には, 認知的な動機と社会的な動機が働いていることを当事者の記述, インタビューデータ, ビデオデータからのトランスクリプトと静止画の組み合わせによって示した. ポスター発表.
49. 「視覚障害者の「知覚」を焦点とする情報授受: 歩行訓練場面における触覚と「これ」の組み合わせ使用」	共同発表 (第2発表者)	2018年10月28日	EMCA研究会2018年度秋の研究大会, 日本女子大学目白キャンパス.	④ 歩行訓練場面を視覚障害者と歩行訓練士の情報授受の側面から捉え, 触覚と言語表現「これ」の組み合わせ使用についての分析を示した.
50. 「引き延ばされる「今」: 視覚障害者の歩行訓練場面に於ける『今・ここ』性の違い」と「タイミング調整」	共同発表 (第1発表者)	2019年3月8日	人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第85回研究会 (京都大学協動的知能共同研究講座共催)	⑤ 京大協動的知能共同研究講座との共催特別セッション「時間と記憶～自己と他者のあいだの礎～」での発表. 歩行訓練場面では白杖という道具＝人工物によって視覚障害者の身体, 感覚, 認知が拡張され, 時間的にも拡張されるが, これには限界があり, 訓練士は説明のタイミングを調整することによって, より大きな拡張を成し遂げていることをビデオデータを用いて示した.

<p>51. 触ることとさし示すこと: 歩行訓練場面に於ける「触常者」と「見常者」間の共同注意の達成 Touch and pointing : Achieving joint attention between a person with visual impairment and an orientation and mobility specialist in walking training</p>	<p>単独発表</p>	<p>2020年9月16日</p>	<p>人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第89回研究会 2020年9月16-17日</p>	<p>Also in walking training touching is important for persons with visual impairment. The white cane as the extended body expands the space and time for them. They often make direct contact with their hands, not with their white canes. By this, various information such as the detailed shape, material, and temperature of the object can be obtained. In addition to such "exploration", they also "point" the object by touching it. In the interaction between sighted persons, joint attention is often achieved by using two or three resources, "pointing at the object" and "gaze at the object", and sometimes with "deictic words" at the same time. Persons with visual impairment often achieve joint attention with the sighted person by "touching" and sometimes with "deictic words". So this "touching" may be called as "touching as pointing". By converting "touching" as a means of exploration and knowledge into a means of interaction, persons with visual impairment fuse the world's way of handling by themselves and the world of sighted persons. This is shown by talk-in-interaction (EMCA) analysis. .</p>
<p>52. 埼玉大学主催 国際シンポジウム: パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション (企画・司会)</p>	<p>共同</p>	<p>2021年3月26日</p>	<p>埼玉大学主催 国際シンポジウム: パンデミック時代におけるアート・ミュージアム・インタラクション</p>	<p>・新型コロナウイルスの世界的流行により、不特定多数の人が集まる場であるミュージアムは、2020年春先から断続的に閉館や中止等の対応に追われた。 本シンポジウムは、芸術学、社会学、博物館学の各専門家と学芸員およびアーティストによる、パンデミック前とパンデミック後のアート・ミュージアム・インタラクションの変容を検し、新たな方法論の提案を試みる。</p>

<p>53. Parsons社会学再発見: パーソンズ・EMCA・文化人類学</p>	<p>単独発表</p>	<p>2021年5月22日</p>	<p>2021年度日本法社会学学会学術大会ミニシンポジウム</p>	<p>エスノメソドロジー・会話分析 (EMCA) に於いてキーとなるべき概念のひとつが、「自然言語の習熟/自然言語を習熟したメンバー」であり、その意味では「言語とはどのようなものか」はEMCAの重要な研究主題であるはずである。EMCAの中でもCAはその最初期からこの問題に対して、「発話」を「行為」と見做すことでひとつの答えを提示し、その前提のもとで研究プログラムを進めてきた。しかし、CAで用いられる言語に関する諸概念は、実は言語学から「密輸入」されたものが大半である。パーソンズの時代にあつてはアメリカの言語学は文化人類学と極めて近い関係にあり、社会学もやはり文化人類学と深い親交があつた。「メンバー」という概念は、何らかの限られた人々のグループを指しており、それぞれのメンバーでは「異なる自然言語」を前提とせざるを得ない。にもかかわらず、EMCAには非常に強い「普遍性」、「統計的・確率的・相対的な普遍性」ではなく、「論理的・絶対的な普遍性」を想定する傾向がある。一方、言語学、文化人類学には、Sapir-Whorfの「言語相対論」やK. Pikeの「etic/emic」のように極めて強い言語を含む文化相対主義が見られる。本報告では、『Parsons Primer』の価値(文化)の章を手掛かりに、上述の主題を検討し、合わせて、文化の一部である慣習と法の関係についても若干の議論を行なつた。</p>
--	-------------	-------------------	-----------------------------------	---

<p>54. 複合感覚性を記述する:映像データからどこまで迫れるか:視覚障害者の歩行訓練と複合感覚性:反響定位を中心に</p>	<p>共同発表 (第2発表者)</p>	<p>2022年3月27日</p>	<p>エスノメソドロ ジー・会話分析研究会2021年度春の研究例会</p>	<p>相互行為の中で人は「暗黙に(seen-but-unnoticed)」多様な感覚を使っている。これに対して、ビデオに依拠した EMCA 研究で用いられる映像は、「視覚」と「聴覚」という2つの感覚だけを記録している。近年, multimodality さらに multisensoriality という観点から諸感覚およびそれらの複合性を含む場面を扱う可能性 (videographability 問題)に関心が向けられている。本報告の主張は以下の7つである:①歩行訓練の参与者である視覚障害者=触常者は視覚ではなく, 聴覚, 触覚, 嗅覚などを用いている。②それらの感覚は晴眼者=見常者である歩行訓練士との相互行為の中で/を通して「分業」や「共同」として達成されている。③これは参与者, そして観察者/分析者に観察可能/説明可能である。④そこで志向されているのは, 主に環境=リアルワールドを知ることである。⑤聴覚には発話以外の環境音や反響定位なども含まれる。⑥触覚も, 白杖(手)によるタッチやスライド, 足裏感覚など多様である。⑦以上の感覚はまさに複合的に用いられているが, 「間身体性を達成する方法と資源としての感覚との相互反映性=相同性」という EMCA 研究の観点から研究を進めることができる。本報告では, multisensoriality に関わる事例分析によって, 参与者の「リアリティ」への接近を目指した。</p>
<p>(演奏会・展覧会等) 1.</p>				
<p>(招待講演・基調講演) 1.</p>				
<p>(受賞(学術賞等)) 1.</p>				

研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 「乳児の気質・母子相互交渉と自己認識形成との関連について」	分担		1988年～1989年	東京外国語大学		1. 2. 乳児の気質・母子相互交渉と自己認識形成との関連についての質問紙, 実験, 観察を用いた多面的な研究。分担としてはとくに母子間の音声による伝え合いについての探索的データ解析
2. 「「相づち行動」の機能・形態・分布に関する記述・分析」	代表(個人)		1999年～2001年	常磐大学		「相づち行動」についてその機能・形態・分布に関する記述・分析をおこなった。研究開始時に計画していた数量的アプローチの限界が明らかとなり、質的な分析が必要なことが明らかとなった。
3. 「重度難聴児の初期言語におけるコミュニケーション機能の評価法の開発」	分担		2000年～2002年	筑波大学		「安田生命社会事業団」の助成研究(1998年～1999年)の研究の継続的内容。重度難聴児の初期言語におけるコミュニケーション機能の評価法の評価および性能の向上を事例研究を中心に行なった。
4. 「初期の語彙獲得に対する言語入力の影響(日英語対照研究)」	分担		2000年～2002年	愛知淑徳大学		初期語彙獲得における名詞優位性の問題をデータベースCHILDESを用いて日本語と英語で対照研究した。とくに、養育者の入力との関係に注目した。複数例の縦断データを用いて養育者のインプットを詳細に検討することによって、言語のタイプよりも、個々の母親のインプットが名詞優位性(或いは非名詞優位性)の決定因となる事を示した。
5. 「世界の「見え」の共有技法の研究: 視覚障害者と晴眼者の相互行為分析」(特設分野研究: オラリティと社会)	分担	基盤研究(C)	2018年度	山口大学	270000 (2018年度) 270000 (2019年度)	歩行訓練場面における視覚障害者と歩行訓練士の相互行為を分析することで両者がどのような世界の見えをどのようにして共有しているのかについて記述する。

<p>6. 高齢者や故郷を離れた人々の日常性と共在性を支援するシステムの社会学的工学的研究</p>	<p>分担</p>	<p>基盤研究 (A)</p>	<p>2019年度</p>	<p>埼玉大学</p>	<p>140000 (2019年度)</p>	<p>社会学者と工学者が協力して「研究項目①高齢者や故郷を離れた人々の日常性の研究」と「研究項目②高齢者や故郷を離れた人々の共在性の支援の研究」の研究を行う。本研究の特色は、社会学者と工学者が地域コミュニティ人々と協力して、孤独に陥りがちな高齢者や故郷を離れた人々の日常の社会的活動（日常性）の現状を研究し、分断や孤立化を生んだ情報通信技術の人々の日常性や共在性を支援するシステムに転換することによって、高齢者や故郷を離れた人々が地域コミュニティの人々と一緒に様々な活動を行うための支援を行うという点にある。本研究では、高齢者や故郷を離れ人々の日常の家庭や施設内や屋外での活動の現状や問題点を明らかにする。さらに、高齢者や故郷を離れた人々の日常活動のエスノグラフィーに基づいて、ロボット車いす、ロボット買い物カート、遠隔買い物システム、接客ロボットの開発を行う。</p>
<p>7. 非対称的インタラクションへの対照統合的接近：触覚の現象学的社会学構想とデザイン</p>	<p>分担</p>	<p>挑戦的研究 (萌芽)</p>	<p>2020年度</p>	<p>成城大学</p>	<p>260000 (2020年度)</p>	<p>主に活用されている感覚モダリティが非対称的であるひとびとの間、すなわち機能障害があるひとと機能障害のないひととの非対象的インタラクションを比較対照し統合を試みる。視覚障害者や失語のあるひと、盲ろう者などの障害者の関与するインタラクションの録音録画記録をエスノメソドロジー・会話分析によって研究する。直接経験として接近することが難しい経験について、フィールドワークによって得られたデータを活用して、自然的な態度の構成的な現象学という視点を徹底することで現象学的社会学への提言をおこなうことをめざす。</p>
<p>(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1.</p>						

<p>(共同研究・受託研究受入れ)</p> <p>1. 「方言のイントネーションに関する実験音声学的研究」</p> <p>2. 「方言のイントネーションに関する実験音声学的研究」</p> <p>3. 「地域におけるコミュニケーション障害児の療育支援方法の開発について」</p> <p>4. 「社会におけるコミュニケーション障害児の療育支援方法の開発について」</p>	<p>分担</p> <p>分担</p> <p>分担</p> <p>分担</p>		<p>1983年</p> <p>1984年～1985年</p> <p>1998年</p> <p>1999年</p>	<p>トヨタ財団</p> <p>トヨタ財団</p> <p>安田生命社会事業団</p> <p>安田生命社会事業団</p>		<p>1.2. 全国8地点（盛岡、仙台、東京、名古屋、大阪、広島、福岡、宮崎）の若年層（大学生）の方言における文末助詞とそのイントネーションの組み合わせの機能の記述的分析</p> <p>3.4. その障碍ゆえに、発話が極端に少ないために、困難であるとされている、重度の難聴児における初期言語の発達を測定・評価するための方法を検討するプロジェクト。発話が少ないことから、現状の把握・将来の発達の予測・訓練計画の立案・親への指導などのためには、言語の形式面からのみではなく、実際のインタラクション（相互交渉）の中で、それぞれの発話が持つコミュニケーション上の機能からの評価が必要である。 評価法の枠組み。健聴児と難聴児の1事例ずつの比較。複数の健聴児と難聴児との比較である。健聴児と難聴児に量的・質的な特徴があることが示された。以上のデータに基づいて形式面と機能面の両方のカテゴリーの分類基準の再検討を行った。</p>
<p>(奨学・指定寄付金受入れ)</p> <p>1.</p>						
<p>(学内課題研究(共同研究))</p> <p>1.</p>		<p>—</p>		<p>—</p>		

<p>(学内課題研究(各個研究))</p> <p>1. 「初語期から2歳台までの言語・コミュニケーション発達についての縦断的研究」</p> <p>2. 「相づち行動のコミュニケーション学的研究：日本手話における「相づち」」</p> <p>3. 「3歳台から4歳台までの言語・コミュニケーション発達についての縦断的研究」</p> <p>4. 「高次認知的行動における言語の役割」</p>	—	—	1998年	—	—	常磐大学課題研究助成
<p>(知的財産(特許・実用新案等))</p> <p>1.</p>	—			—	—	